

BOOK REVIEW

当事者に聞く 自立生活という暮らしのかたち

私事で恐縮であるが、著者の河本のぞみ氏とは、3つのご縁がある。一つは「水俣」、一つは「当社で訪問看護の講義をしていただいた」、もう一つは「同じ作業療法士」である。私はチッソ水俣病患者連盟委員長の川本輝夫を父に持ち、家族・当事者の立場から語り部として水俣と水俣病の歴史を語り継いでいく使命をもっている。河本氏は障害者の自立生活を見て回るうちに水俣を訪れ、地域リハの視点から、その生活と歴史を記事にもしている。

「水俣」をどのように位置づけるのか個人的にも大変興味があった。

書評を書くにあたり最初のページから読み始めた。冒頭に「現実の生活というものの前には、ケアでも介護でもない『リハビリ』は、どんな内容を盛り込もうと、やはり残念ながら色褪せる」「『できない』まま暮らす暮らしのありようがあるということ、それを知っておく必要があると思った』『できなければだめなのかという問いかけと、まったく別の位相から出てくる、だめじゃないという答え』など、本書を上梓する目的を明確にしている。

本書は5部構成となっている。第一章は「暮らしのかたちを当事者に聞く」、第二章「もうひとつの暮らし方—その先駆者たち」、第三章「介助する人」、第4章「リハビリテーションのこと」、最終章「旅の終わりに」である。

読み進めるうちに自分の「無知、無力さ、傲慢さ」を思い知らされた。私自身「作業療法士（生活を支える専門職）」として、当事者に寄り添ってきたつもりだった。しかし、私のその薄っぺらな矜持は、自立生活を実践している当事者たちの前では「見事に色褪せた」。

実は、このことは、私自身も「うすうす感じていたこと」でもある。著者は、「必要なことは専門職のほうが知っているという、もう身にへばりついた思い上がりだ」と述懐している。当事者の声にも、「介護経験者は当事者の困りごとを先取りして済ませてしまう。介護素人のほうが、ともに対等な関係性を構築できる」ことが挙げられている。著者は「介助」と「介護」の違いにも触れている。専門性って何だろう？行間から著者の嘆きが聞こえてきそうだ。

本書に出てくる原田正純医師は、水俣病胎児性患者を発見し、生涯を水俣病患者に寄り添い支え続けた方である（2012年6月逝去）。原田医師には、公私にわたりご指導いただいた。「現場から学ぶことが大切だ」が口癖だった。

著者の7年をかけた、綿密かつ現場の生の暮らしの息づかいが聞こえてくる本書は、医療に限らず専門職の場に立つすべての人が「あらためて当事者・現場から学ぶ」ことの重要性と責務を、余すことなく伝えている。ぜひ一読を。



●河本のぞみ=著

(A5/320頁/3,000円+
税/三輪書店/2020年)

評者

川本愛一郎

有限会社リハシップ あい、
代表取締役・作業療法士